

先進事例紹介①

#	登壇団体名	講演名
1	有限会社わが家	取組事例の紹介

【発言要旨】

■ 事業立ち上げの背景と理念

- 元公務員として特別養護老人ホーム等を経験し、「豊の上で最期を迎えたい」という切実な声に向き合う中で、制度の限界を感じ、自ら望む介護を実践するため退職・起業した。
- 2004年、女性2名で宅幼老所わが家を開所し、「住み慣れた地域で最期まで」を理念に活動を開始した。起業の原動力は「目の前の人に必要ことを提供し続ける」という姿勢であり、制度ありきではなく現場の声に応じて事業を展開している。

■ 介護・福祉を核とした多機能型事業の展開

- 当社は、介護保険サービス、障害福祉、訪問介護、託児、移動支援、生活支援、食事配達、旅客運送、飲食、物販、不動産管理、公衆トイレ管理まで幅広く展開している。
- 特に、長野県が独自に推進する地域ケア拠点の総称である宅幼老所であり、介護が必要となった高齢の方が、住み慣れたご自宅、地域で暮らすためのサポートをする施設「小規模多機能型居宅介護」（「あずま家」）や、「看護小規模多機能型居宅介護」を運営し、「通い・泊まり・訪問」を柔軟に組み合わせる地域ケアを行っている。
- また年齢や障がいがあるなし関係なく、みんなに集まってほしい福祉施設として利用いただいている。

■ 多世代・多文化の共生を促す独自の取り組み

- わが家は介護のみならず、赤ちゃんボランティア、み

んな食堂（多世代食事支援）、子連れ出勤、高齢者・障がいの役割創出、外国人材の受け入れや多文化交流会など、働く人・利用する人を区別しない「みんな主役」の場を整えている。

- 地域の孤立しやすい層にも着目し、男性介護者のつどい（メンズ飲みニュケーション）を毎月開催し、新しい縁づくりや介護負担緩和につなげている。
- 空き店舗を再生した「オヒサマの森」では、介護・商業・サロン・カフェ・チャレンジショップなどを複合化し、地域の中心市街地のにぎわい再生にも寄与。

■ 地域を巻き込む拠点形成と実践の積み重ね

- 地域住民と共に「わが家サロン」やキッチンカーイベント、マルシェを開催し、住民が自然に集まる小さな居場所を各所に作ることを重視している。
- 行政とは「共に生きる」関係として、制度を共に作り、必要があれば自ら仕組みを提案する姿勢で取り組んできた。村からの委託で整備・管理する公衆トイレは、デザイン性と機能性を備え、子どもや高齢者が安心して使えるトイレとしている。

■ 今後の展望

- わが家は現在、「多世代・異文化・移住者が共に暮らす交流シェアハウス」の構想を進めており、移住者住宅・特定技能者住宅・高齢者住宅・シェアカフェ・ビオトープなどをまちなかに整備する計画である。
- 地方には都市と異なる需要があるため、「地域に必要な仕組みは自分たちで作る」という姿勢を大切にしている。地域のよろず屋として、行政・企業・住民

の協働により、小さな実践を積み重ね誰もが役割を持ち、住み続けられる地域づくりを目指している。

【主な質疑】

■ 公衆トイレを息抜き・明日の活力になる場として整備した意図は何か。地域住民の声がきっかけか、それとも貴社の発想か。

- 元々、既存の公衆トイレが道路拡幅で使用できなくなるため、行政から「新しい公衆トイレの管理・整備」を依頼されたことが出発点である。
- そのうえで、女性スタッフの意見や自らの発想を踏まえ、「訪れた人が少し気分転換できる空間」を目指し、パウダールームやアメニティなどを設置した。
- 単なるトイレではなく、地域にとってほっと一息つける場所にすることで、住民の生活の質を高められると考えて整備したものである。

■ 男性の引きこもり対策として、昼間にアルコールも楽しめる集いを開催しているが、最初にどのように男性たちを呼び込んだのか。

- 地域の中でおせっかいな女性スタッフが中心となり、「この人は気になる」「私が連れてくる」といった形で一人ひとり声をかけ、個別に誘うことから始めた。
- 特に退職後に地域とのつながりが弱くなる男性に対し、自分を気にかけてくれる誰かの存在が参加の後押しとなった。
- 結果として十数名が継続的に参加する会へ発展しており、男性の孤立防止や介護負担軽減に寄与している。